

指導者（保護者）として大切にしたいこと（その15）

～「ミニバスケットボールの今昔 ③」～

2020年5月吉日

広島県バスケットボール協会U12部会

スーパーバイザー 大庭浩資

## 6 役員、指導者

私がミニバスケットボールの指導を始めた頃は、中には一般の方もおられましたが、指導者の90%かそれ以上が教員でした。またバスケットボール経験者もそんなに多くはおられませんでした。そのような環境でしたから、私のような素人も快く受け入れていただけたのではないかと思います。

その後、ミニバスがだんだんと盛んになるにつれて、昔バスケットボールを経験されていた人、またミニバスのOGやOBの皆様も、指導者として加わるようになりました。これらの皆様は、教員だけでは考えつかないようないろいろなアイデアを示唆してくださいました。また役員としても各種委員会で活躍いただきました。それが今の組織の充実につながっています。

指導者の数自体が少ないので、審判ができる人はさらに少なく、ルールをよく理解しないまま審判をされていた方もおられました（もちろん私もそうでしたが）。それでも何とか試合や大会が成立していましたから、当時は何ともほのぼのとした雰囲気であったことが伺えます。またコーチの皆様も優しい人ばかりだったのでしょう。（笑い）

また指導者や審判ができる人が少ない分、大会では、第1試合の審判を行い、第2試合の自分のチームの試合のコーチ、次に第3試合の審判をやり、さらに第4試合の自分のチームのコーチ・・・といったことは日常茶飯事でした。

公式戦でも会場によっては、前述したサイクルに加えて、一人で審判をしたり、あるいは自分のチームの試合を審判したりするなど、今話しても信じてもらえないことも時にはありました。（笑い）

さらに全関西ミニバスケットボール交歓大会も同じような様子でした。

今でこそ、グリーンアリーナという立派な会場で、全チーム、全指導者・役員が集まって運営されますが、当時は市内の各小学校の体育館で分散して行われていました。ですから広島県の指導者や審判の数も十分ではなく、会場によっては他県からの指導者も、審判、試合、審判の繰り返しだったこともあります。それでもほとんど苦情が出ることはなく、こちらもほのぼのとした雰囲気で行われていたのが思い出されます。

## 7 審判

今は全審判員がきちんとした講習を受けてライセンスを持つとともに、正式な服装で審判をされていますね。

しかし当時の審判で、審判着を着ている人はほとんどおらず、みんなまちまちの服装で審判を行っていました。ジーパンに T シャツ、ジャージの上下などの服装です。ですから、いざ試合が始まると、どの人が審判でどの人が応援の保護者なのか全く分からない有様です。(笑い)

さすがに準決勝や決勝は、正式な審判着を着た方がされていましたが、それだけきちんと審判ができる人が少なかったということかもしれません。もっと言えば、当時のミニバスケットボール界には、日本公認の方がほとんどおられなかったのではないかと思います。

その後しばらくして、数名の方が県の審判委員長の推薦で日本公認となりました。さらに1～2年して、県の審判委員会による公認審査会に、ミニバスの指導者が呼ばれるようになりました。わたしはその第1回目の審査会に参加させてもらい無事公認をいただきましたが、お昼の弁当ものどを通らないくらい緊張したのを覚えています。

それから後は、2年に1回行われる審査会で合格した方が、日本公認を取得されることで、ミニバスの指導者の中にも日本公認の方がどんどん増えていきました。

当時の、左胸の青色のワッペンが、審判を志す人のあこがれでした。ましてや赤色ワッペンや黄色ワッペン(昔でいうA級や2A級)の方の審判は見るだけでもありがたく、ましてやその方々に試合の審判をしてもらえるのは、それはそれは光栄なことでした。

では、日本公認の方が増える前の審判の技術はどうだったのでしょうか？

それについてはバスケットボールが素人の私の口から話すことはできませんが、当時の様子を思い出すと、以下のようなことが多くありました。

- ・味方のパスをファンブルし、それを保持してドリブルしたらダブルドリブル？
- ・ファールの判定も今なら「ブロッキング」や「ハッキング」が、なぜか当時はほとんどが「プッシング」？
- ・オフェンスチャージングをとる人はおらず、突っ込んだ者勝ち？ などなど。

これらは、丹スーパーバイザー(前会長:すでに日本公認を取得されていました)がミニバスの組織に加わられた時に、大会や審判講習会等で間違いを指摘し、的確な助言をされたことでずいぶん解消されました。私自身、話を聞きながら「目から鱗が落ちるとはまさにこのことだ」と感じたのを今でもよく覚えています。

また、準決勝と決勝は、一つの会場で行われましたので、審判をする2名を全指導者がステージの上から見ていました。審判をしていると、判定のたびに、ステージの上から「えっ？」とか「うそ～」とかの声が聞こえてくるのがとても大きなプレッシャーでした。しかしその分、しっかりと鍛えられ審判の技術が向上した人も多かったと思います。(笑い)